

明瀬匠悟は窓辺の椅子で頬杖をつき、つまらなそうに外を眺めていた。雑居ビルの三階の窓からは、やわらかい日差しが差し込み、いつも彼が使っているデスクの上を温めている。この穏やかな初夏の陽気にもかかわらず、彼がこうして面白くなさそうにしているのは、あまりにも穏やかすぎるからだ。

彼は大学の後輩と一緒に、数か月前からここに完全紹介制の探偵事務所を構えている。「完全紹介制」という言葉が示す通り、この事務所にやってくる人々は皆、彼の知人か、知人に紹介されてやってきた人物ばかりだ。わざわざそんなところに事件を持ち込むのだから、それが猫探しや浮気調査の依頼であるはずがない。明瀬がしているのは、不可解な謎を解く、推理小説で描かれるような探偵の仕事なのだ。

彼は中学生の頃、ある事件に遭遇し、それを解決した。明瀬匠悟、初めての事件である。そして、それからというもの、なぜか彼はよく事件に巻き込まれるようになり、また、そうでなくても、彼の活躍を知っている友人たちから、事件の解決を頼まれるようになった。さらに、大学に入ると、その友人たちから評判を聞いて、彼を訪ねてくる人まで現れ始めた。

ただ、明瀬がそのことを嫌がっていたかという点、そうでもない。彼は持ち込まれた事件を解くことを、それなりに楽しんでいて、大学に入ってから、解決した後、事件を持ち込んだ人物から依頼料をもらってみたい。だから、彼は自分の娯楽とお金のために——事件の性質によってはうんざりすることも間々あったが——次々と謎に立ち向かっていった。

そして、明瀬が現在のパートナーに出会ったのが、大学二年生の

春。彼の所属していたミステリ研究会——通称「ミス研」の、新入会員紹介の時だ。

「僕は永緑涼といいます。推理小説では『国名シリーズ』が好きです。でも、ホームズはそうでもありません」

かの有名なシャーロック・ホームズをやや否定的に評価したその自己紹介の出だしに、ミス研の面々は少なからず驚き、そして、珍しいものを見るように永緑をまじまじと見つめた。

永緑はホームズは好きではないと言ったが、わざわざミス研に入った事実からもわかる通り、推理小説が嫌いなわけではなかった。むしろ、永緑は重度のミステリマニアであり、ホームズが好きでない理由は、単に好みの問題らしかった。

少年のように目を輝かせて推理小説を語る永緑の姿は、明瀬の目に新鮮に映った。永緑は、明瀬がそれまでに出会った誰よりも、不可解な謎や名探偵といったものに強い憧れを持っていた。だから、明瀬の経歴を知ってから、彼に付きまとうようになったのも当然と言えるのかもしれない。

もちろん、永緑のことをまだよく知らない頃は、明瀬も嫌がって永緑を避けていたが、やがて自然に打ち解けて、一月ほどたつと、二人で事件の解決に取り組むようにまでなっていた。

それから三年。大学を卒業した明瀬は、大学院には行かずに、四年間に稼いだお金で街中の雑居ビルの一室を借り、すっかり親しくなった永緑とともに探偵事務所を始めた。この事務所は、明瀬と永緑の職場であるだけでなく、彼らの住まいでもある。部屋はいくつかに分かれていて、出入り口のある一番手前の部屋には事務用のデスクや応接セットがあり、それ以外の部屋には生活していくために必要な最低限の設備がある。事件の調査と買い物とき以外であれば、明瀬はたいいていこの事務所にいるが、永緑の方はまだ大学四年生なので、いつも事務所にいるわけではない。

つい昨日まで、明瀬はある事件の捜査で、一か月ほど探偵事務所

を留守にしていた。明瀬がそれほど長期間手こずっただけあって、かなりの難事件であり、テレビでも大々的に報道されていた。

明瀬がつまらなそうにしているのは、そんな大仕事の直後で今は取り組むべき事件がなく、そのうえ、話し相手の永緑が大学へ行っていて不在だからだ。

退屈を持って余した明瀬は、ずつと下の歩道を見つめている。依頼人が訪れるのを当てもなく待っているのだ。

彼は深くため息をついて言った。

「早く事件が起こってくれないかなあ……」

不謹慎だが、それが彼の偽らざる本心だ。しかし、この窓から見える景色は、残念ながら、どこまでも平和だった。

また彼がため息をつきそうになった時、ある男の姿が目にと留まった。スーツを着こなした、サラリーマン風の人物だが、その左手にはビジネスバッグのほかに、地図らしき紙切れが握られている。そして、男はときどきその紙に目を落として周りを見比べながら、こちらに向かつてきていた。明らかに何か——おそらく建物だろう——を探している。

もしかして、と明瀬は思った。あの男はこの建物を探しているのではないだろうか。確か、このあたりには有名なお店やコンサートの会場といったものはなかったはずだ。

淡い期待だったが、明瀬は依頼人を迎える準備をすることにした。まず、やや散らかっていたデスクの上をさつと片付けた。次に、お茶を入れるために奥の部屋に向かう。もしあれが依頼人でなかったら自分で飲むことにしよう、などと考えながら彼がお茶を入れていると、階段を上がる音が響いてきた。どうやら彼の勘は当たったらしい。お茶を入れ終わって奥の部屋から出てきたのと、ドアの「完全紹介制・明瀬探偵事務所」と書かれたすりガラスに依頼人の姿が現れたのは、ほぼ同時だった。

コンコン、とドアがノックされた。

「どうぞ」

穏やかな午後、めでたく終わりを迎えた。

2

大学の講義が終わった後、永緑涼は特に寄り道をするともなく帰ってきた。太陽はすでに空の西側にあつたが、日没までにはまだ時間がある。探偵事務所のある雑居ビルは、最寄り駅から徒歩五分だ。階段を上る前にビルを見上げると、窓を開けてタバコを吸う男と目があつた。このビルの二階にはサラ金業者があり、この男はこの従業員だ。やくざのような顔と服装——というより、実際にそう——ではあるが、彼らを悩ませていた事件を明瀬が解決したことがあるため、困ったときは義理堅く助けてくれる。

階段を上り始めた永緑は、ちょうど二階の踊り場を通り過ぎたあたりで、満足げな表情をしたスーツ姿の男とすれ違った。どうやら、永緑たちの事務所から出てきたらしい。すると、今の男は依頼人だったのだろうか。

永緑は階段を駆け上がって、事務所に入るなり明瀬に尋ねた。

「先輩。今、階段で男の人とすれ違ったんですけど、依頼人ですか？」

「えっ、ああ、そうだよ」

依頼人が帰って気が緩んだところに突然現れて声をかけられたので、明瀬は不意を突かれて一瞬だけ戸惑った。そこに追い打ちをかけるように、永緑は続けて訊く。

「どんな事件だったんですか？」その後、うつとりとした表情になって、「ここにやってきたからにはきつと——そう、古い屋敷か孤島で起きた、不可思議そして凄惨、無慈悲な連続不可能殺人事件——」

「そんな血みどろの大事件じゃないから安心しなよ」

物騒なことを言い出したので、明瀬はすぐさま否定した。すると、永緑はけるつと真面目な顔に戻って、

「わかってます。でも、それなりの事件ではあるんでしょう？ 当事者が自力では答えを見つけ出せなかったわけですから」

「うん。一応、密室だったらしいからね」

「密室っ？」その単語を聞いた途端、永緑は目を見開いて明瀬に詰め寄った。「密室だなんて、十分に大事件じゃないですか！ いったいどんな事件だったんですか！」

永緑の前では安易に口に出してはならない言葉、というものがいくつもある。その一つが「密室」だ。それを聞くと、永緑は豹変する。現実になぎとめている鎖が外れ、あるかどうかもわからない謎に興味津々、猪突猛進……。

そうなってしまう場合は、まず、永緑をなだめなければならぬ。

「まあまあ、落ち着いて。とりあえず座ろうか」

明瀬は興奮している永緑の肩を押さえて、無理やりソファに座らせた。

次にすべきことは、永緑の聞いた言葉が聞き間違いや何かの勘違いだった場合はそれを説明し、そうでなかった場合は、包み隠さず自分の知っていることをすべて話してしまうことだ。今回の場合はもちろん後者である。謎に取り憑かれた永緑の前では、守秘義務などは無意味なのだ。

「今回の依頼人が持ってきた事件は、確かに密室殺人事件だったよ。でも、密室とは言っても、この事件の場合、その作り方は問題じゃない。この事件の主題は、密室が『どうやって』作られたのか、ではなく、『なぜ』作られたのか——つまり、密室の動機だったんだ」「ホワイダニットですか？」

「いや、それが、そうでもないんだ。ホワイダニットというのは、犯人がなぜ被害者を殺したのか、という謎を事件の中心に据える推理小説の形式のことだろう。だけど、この事件では、犯人がなぜ被害者を殺したのか、それは自明なんだ。さつきも言ったように、こ

の事件の主題は、なぜ密室が作られたのか、だよ。これは、殺害の動機とは一切関係がない」

「関係がない？ どういうことですか？」

「それを説明するためには、事件について話さないとね……」ここで、明瀬に小さな戯れ心が働いた。「そうだ、君も推理してみるかい？」

3

永緑はバッグをソファの横に置いて、姿勢を正した。手には手帳とボールペンを持ち、話を聞く準備はすでに整っている。明瀬は依頼人に出していた茶碗を洗って棚にしまった後、永緑の向かい側のソファに座った。

「事件の依頼人は保険調査会社の調査員の佐藤健太郎さんという男性だ。紹介したのはミス研の先輩だった、清木さんだ。覚えてるよね？ ほら、あの、ミス研で一番のミスリマニアで、一番の変わり者でもあった——」

「ええ、覚えてます。僕の三つ上の学年で、スマートフォンどころか、携帯電話さえ持っていなかった、あの先輩でしょう？」

「うん。大学生で早くも結婚していた、あの先輩だ。彼が佐藤さんを紹介——とは言っても、紹介状はなかったんだけど——したんだよ」

清木という名前の先輩は、ミス研の会員の中で、明瀬や永緑と並んで有名だった人物だ。

ミス研会員の間では、明瀬の「アカ」、永緑の「緑」、清木の、清の字の「青」を光の三原色に見立てて、この三人を「ミス研の三原色」、もしくは、三大奇書にちなんで「三大奇人」と呼ぶのが通例だった。この三人に、清木と同学年の親友で、会長だった黄金井という人物を加えて「四原色」や「四大奇人」と呼ぶ者もいた。

そのように言われるほど、清木という先輩は異色の人物だった。

特に推理小説に関しては、読書量が永緑よりも多く、誰もが認めるミス研随一のミステリマニアだった。しかし、永緑のように、不可解な謎に憧れを抱いていたというよりは、その作り方や構造に強い興味があったようで、ある意味では推理小説に冷めていたとも言える。それでも、ミス研の中で最も詳しい人物であることは確かだった。あらゆることに無頓着だったが、子供好きで、人付き合いもそれほど悪くなかったため、だいたいの人は彼に対して好意的に接していたものだ。

現在のミス研では一番のミステリマニアである永緑は、懐かしそうに笑った。

「紹介状がないところも、清水さんらしいですね。でも、完全紹介制なのに、紹介状もなしに依頼を受けるなんて、そんなことではないですか？」

「まあ、あの先輩のことだからね。仕方ないよ」

そう言って、明瀬もわずかに口元をほころばせた。

「……それじゃあ、メモの用意もできているみたいだし、これから本題に入ろうか」

明瀬が言うと、永緑は真剣な顔つきに戻って、ボールペンを持ち直した。

それを見てから、明瀬は事件の説明を始めた。

「佐藤さんは、保険調査会社の仕事で、ある事件の被害者が生命保険に入っていたため、その事件について調査をすることになった。それが、密室で起きた殺人事件だったんだ。彼の仕事は、保険金の受取人に、保険金を支払うべきかそうでないか——言い換えると、被害者が自殺であるかどうか、また、保険金の受取人が犯人であるかどうか、を調べることだった。」

彼の話によると、被害者——この人を「Aさん」と呼ぶね——は別居中の奥さんがいる一人暮らしの男性で、生命保険に入ったのは、保険金の受取人である奥さんと結婚した五年前。Aさんの死体が発

見されたのは今年の四月だ。ちょうど、新学期の頃だね。

まず、死体はどうやって発見されたのか説明するね。発見者は近所に住んでいる主婦の女性で、発見したのが午後三時ごろ。そのあたりは人通りが少なく、通るのは通勤するサラリーマンや、学校に通う小学生のような、そのあたりに暮らす人だけらしい。だから、発見された時にはもう死後一時間ほど経過していたそうだ。

発見者の女性は、買物物の帰りにAさんの家の横を通りかかった時に彼の遺体を見つけたようだ。Aさんの家は二階建ての一軒家なんだけど、その一階に、道路に面した壁の大部分が窓——この窓というのは、マンションでベランダ側の壁についているような、開ければ人が立って通れるものだ——になっている部屋があって、その窓から部屋の中の様子が見えるらしい。女性がその道を通った時は、カーテンが閉まっていたそうだけど、彼女はカーテンの一部が、赤くなっていることに気づいた。それで、不審に思って近づいてみたんだ。すると、カーテンの隙間から、Aさんが腹をナイフのようなもので刺されて血を流し、窓にもたれかかっているのが見えた。カーテンの赤い染みは、Aさんの体から流れ出た血だったんだ。

女性は救急車を呼んだ。そして、救急車が到着して救急隊員が家に入ろうとしたところで、その家の扉や窓に、もれなく鍵がかかっていることがわかった。仕方ないので、救急隊員は窓を割って部屋に入ったそうだ。その後、部屋の中にあつたAさんの財布から玄関の鍵が見つかった。それによって、Aさんの家が密室であったことが判明した。

……とまあ、Aさんが発見された経緯はこんな感じらしい。

次に、Aさんが殺害された現場の状況について。さつきはだまかにしか言っていないから、詳しく説明するね。Aさんはカーテン越しに窓に背中を預けるようにして倒れ、腹の右側をAさんの家のものと思われる包丁で刺されていた。カーテンには、Aさんが血の付いた手で握ったと見られる手形がついていた。これはAさんがカー

テンをつかんで閉めたために付いたようだ。包丁からは、Aさん以外の指紋はとれなかった。Aさんの血がべったりと塗りたくられたように付いていて、犯人の指紋は判別できなかったんだ。

そして、これが重要なんだけど、窓の外側のすぐ下の地面に、少しばかり土のたまったところがあって、そこに犯人のものと思しき靴跡があったそうなんだ。どうしてそんなところに靴跡が、と思うかもしれないけど、Aさんの家がある場所はそれなりの田舎でね、家に窓から出入りする、なんてことはよくあるそうなんだ。だからその靴跡は、犯人がAさんの家に窓から出た、もしくは入ったことを示していると考えていい。ただ、跡の残っていた靴は男女兼用でどこにでも売っているようなものだから、捨てられてしまえば犯人の特定には役立たないらしい。

最後に、Aさん殺害の容疑者について。Aさんには別居中の奥さんがいると言ったよね。この奥さんなんだけど、一年前にAさんのもとを離れて実家に帰ったそうなんだ。理由はわからないけど、一年間別居していたとなると、これは相当なものだね。かなりの大喧嘩をしたのかもしれない。奥さんとAさんはお互いのことをずいぶん恨みあって——というより憎みあっていたんじゃないかな。それに、実は、Aさんの家の玄関には一つだけ合鍵があつて、その合鍵を持っていたのが、彼女なんだ。でも、彼女には死亡推定時刻にアリバイがあつた。動機と密室を作る手段はあるけど、犯行は不可能だ。

もう一人の容疑者は、Aさんと同じ職場で働く人物——Bさん——で、この人物は仕事上のトラブルで、一方的にAさんを恨んでいたらしい。ただ、Aさんの方はBさんを恨んでいるわけではなかったそうだ。Bさんにはアリバイがないけど、合鍵もないから、密室を作ることはできない。動機はあるけどね。

また、この二人が共犯である可能性もほとんどない。二人は面識がないからだ。ただ、どちらもAさんの家に窓から上がり込んで、

Aさんを包丁で刺して逃げることは可能だ。犯人がAさんの奥さんである場合は、アリバイが、Bさんである場合は、密室が難点だけだね。

さて、事件の説明はこれだけだよ。ここからは推理タイムだ。犯人はAさんの奥さんか、それとも、Bさんか。現場の状況にはどんな意味があるのか。そして、この事件において最も重要な問題——すなわち、なぜ密室は作られたのか——

明瀬は長い説明を終えた後、まだせわしなく走り続けている永緑のボールペンが止まるのを待った。しばらくして、ペン先をしまうと同時に永緑が顔を上げた。

「えっと……先輩はもちろん、この事件の謎を解いたんですよね」「さあ、それはどうだろう。何しろ話を聞いただけで、事件現場は見えないからね。依頼人に話した解釈が正しいとは限らない」

「それでも、事件の解釈は見つけ出したんでしょう？」「うん。まあ、一応は」

「僕にもできるでしょうか……？」

「きつとできるよ。……それで、質問はない？」

「一つだけあります。なぜ、Aさんは電話で救急車を呼ばなかったんでしょうか？ 腹を刺されただけなら、Aさんはしばらく生きていたはずでしょう？」

「ああ、それは、Aさんの家の電話が壊れていたからだだよ。だから呼べなかったんだ。それに、刺された場所が悪くて、意識が無くなくても無駄だった可能性が高いそうだ。本人もそれをわかっていたのかもしれないね。……ほかには何かあるかい？」

「いえ、ありません」

「じゃあ、考えがまとまったら言つてよ。それまでの間、お茶を入れて待つておくから」

明瀬はそう言つて立ち上がり、奥の部屋に向かった。

その背中を少しの間だけ目で追ってから、永緑は手帳に目を落とし、ぱらぱらとめくりながら、事件の情報を整理し始めた。

4

「せ、先輩！ わかりました！」

見開いた目で手帳を見つめながら、永緑が叫んだ。

するとすぐに、奥の部屋から、湯気の出ている茶碗二つをお盆にのせて早足で出てきた。彼は自分が座る位置と永緑の前に茶碗を置いてからソファに座り、お盆をテーブルの端に置いた。

「考えはまとまった？」

明瀬が訊くと、永緑は自信満々の表情で答えた。

「ええ、これが真相に違いありませんよ！」

「ああ、そう……」

あまりの勢いのよさに、明瀬は苦笑いするしかなかった。永緑の出した結論どういったものなのかはまだわからないが、永緑に少々思い込みの強いところがあるのは確かだ。明瀬は姿勢を正して言った。

「よし、じゃあ、これから推理披露といこうか」

「はい」永緑は自慢げに笑って自分の推理を語り始めた。「……まず僕は、犯人がBさんだと考えました」

「どうして？」

「なぜなら、Aさんの奥さんが犯人だとすると、おかしい点があるからです。例えば、部屋のカーテンが閉まっていたこと。もし奥さんが犯人なら、アリバイは彼女によって作られたものであるはずです。しかし、Aさんの亡くなっていた部屋のカーテンは閉まっていた。カーテンが閉まっていると、死体の発見される時刻が遅れやすくなり、死体の発見が遅れると、死亡推定時刻の幅が広がってしまい、アリバイが成り立ちにくくなってしまいます。苦労して作

ったアリバイが、水泡に帰すかもしれないんですよ。彼女がカーテンを閉めるはずがありません」

「そうかな。もしかすると、そう考えられることを計算していたのかもしれないよ。カーテンに血がつくように、Aさんを窓に寄りかかせておいて、発見を早めたとも考えられる。カーテンが開いて、自分が現場を離れる前に発見されるのを恐れたのかもしれない」

「なら、どうして玄関の鍵をかけたんですか？ そんなことをすれば、自分が疑われることは火を見るより明らかですよ」

「さあ、どうしてだろうね」

「先輩も彼女が犯人だとは思っていないんでしょう？ だから奥さんのアリバイについては詳しく説明しなかったし、『犯行は不可能だ』と断定したんですよ」

「まあ、そう思いたいなら、そう思ってくれてもいいよ」

「……わかりました。では、そう思っておきます。Aさんの奥さんが犯人でないとして、話を進めますね。彼女でなければ、必然的に犯人はBさんということになります。」

Bさんが犯人の場合、動機は十分ですし、アリバイもありませんから、問題は『どうやって密室が作られたのか』ということですよ。

しかし先輩の話によると、この事件の主題は『なぜ』密室が作られたのかであり、『どうやって』作られたのかは重要ではない、ということでした」

「重要ではないとは言っていないよ」明瀬はすかさず指摘した。

しかし、永緑はそんなことは意に介さずに続けた。

「一応確認しておきますが、この事件の真相は、実はBさんは遺体発見当時、家の中に身を潜めていて、その後頃合いを見計らって逃げた、だとか、BさんはAさんの奥さんの家から合鍵を盗んでそれを使った、というようなものではありませんよ」

「もちろんそんなことはないよ。家の中にいたなら、警察に見つか

らないはずはないし、Bさんが面識のないAさんの奥さんの実家を知っているとも思えないからね。もしどこかで二人がつながっていたならば別だけど、それでも、鍵をかけただけで警察がBさんへの追及を緩めるとは思えない。あ、そうそう、当たり前だけど、秘密の抜け道みたいなものもないからね」

「ええ、Aさんの家は普通の一軒家のようにですから、それははなから問題にしません。さて、密室がどうやって作られたのかについてですが、Bさんは合鍵を持っていないので、先輩が言ったとおり、Bさんには密室は作れません。また、Aさんの奥さんにも死亡推定時刻にはアリバイがあります。そのことを考えれば、答えはおのずと明らかになってきます。」

そう、Aさん殺害現場を密室にしたのは、ほかならぬAさん自身だったんです！

永緑は世紀の大発見を発表するかのように明言した。実際、永緑にとつてはそれに比肩するほどのものなのかもしれない。

「Bさんが道路に面しているAさんの家の窓から中に入り、Aさんを刺して窓から逃走した後で、Aさんは窓の鍵をかけ、カーテンを閉めたんです。これが、密室の真相です！」

「……うん。それはいいんだけど、Aさんがどうして窓に鍵をかけたのか、それを説明してはいないよ」

「ええ、わかっています。……僕は消去法によって、奥さんは犯人ではなく、Bさんには密室が作れない、したがって、密室を作ったのはAさんだという考えに至りました。この考えは、密室の動機がこの事件の主題であるが、それは殺害の動機とは関係ない、という先輩の言葉と一致します。ですから、僕が正しい道を進んでいることは確信していました。しかし、Aさんが家を密室にした理由はわかりませんでした。」

推理小説では、被害者が密室を故意に作った人物であり、その死が事故や自殺でない場合、動機は大きく二つに分かれます。

一つ目は、犯人をかばうため。これは、自分にとって大切な人が犯人であるときなどに、その犯罪の立証を妨げたり、自分の死を自殺に偽装したりして、犯人が捕まらないようにする目的で、自分のいる部屋を密室にするといったものです。しかし、この事件の場合、奥さんとは別居中で、仲は険悪だった可能性が高いわけですし、Bさんもさほど特別な存在だったというわけではなさそうです。

二つ目は、犯人の凶行から身を守るため。例えば、部屋の外で犯人に襲撃され、傷を負ったまま犯人から逃げて部屋に入り、扉に鍵をかけて犯人が侵入してこないようにしたけれど、傷口から血が流れて出血多量で死んでしまった、というような場合です。が、この事件の場合、凶器はAさんの家の包丁なものですから、BさんがAさんを刺したのは家の中です。ですから、Aさんが窓を閉めたのはBさんが逃げだした後、ということになります。普通、この状況では、犯人の凶行を恐れて鍵をかけるのではなく、近所の人に助けを求めないのでないでしょうか。電話が壊れて、家から救急車が呼べないのならなおさらです」

「じゃあ、二つの動機の、どちらにも当てはまらないと？」

「はい、そうです。となると、『被害者の作る密室』の動機は、この二つ以外にもう一つ、第三の動機があるということになります。では、それは何か。ここで僕は、いったん原点に戻って、そもそも密室を作る直接的な目的は何か、それを考えることにしました。まず思いついたのが——これは先ほども述べましたが——犯罪の立証を妨げるため。次に浮かんできたのが、殺人を自殺に見せかけるため、でした。」

殺人を自殺に見せかける——これが、Aさんが密室を作った動機です。この事件の依頼人が保険調査会社の男性であり、彼が『被害者が自殺かどうか』を調べていたことからわかる通り、Aさんが自殺だった場合には、受取人である奥さんに生命保険が支払われないんです。つまり、Aさんは、密室を作って自分の死を自殺に偽装す

ることで、彼が憎んでいる奥さんに生命保険が支払われるのを妨げようとしたんです！」

被害者が作る密室の場合、現場を密室状態にして殺人を自殺に見せかける、というのは、犯人をかばうために行われることが普通です。この事件の場合は、同じ『自殺への偽装』でも、その目的の性質が全く違います。だから気づけなかったんですよ。凶器の包丁が血まみれで犯人の指紋が残っていなかったのも、実はAさんが血の付いた手で包丁の持ち手をぬぐったからなんです。

僕の結論をまとめるとこうなります。Aさんは、道路に面する窓から入ってきたBさんに、自宅の包丁で腹を刺された。Bさんが窓から逃げた後、Aさんは自分の死を悟り、せめて奥さんに保険金が入ることは防ごうと思つて、包丁に残った指紋をふき取り、最後の力を振り絞つて窓に寄り、鍵をかけた。しかし、そこで力尽きて亡くなつてしまった。

……どうでしょう。正解ですか？」

永緑は自分の推理を話し終わり、明瀬にそれが正しいか尋ねた。明瀬は困つた表情になつて、

「正解かどうかを聞かれても、正解を知らないんだから答えようがないよ」

「なら、訊き方を変えます。先輩の解釈と同じですか？」

「うーん。だいたい同じといえれば同じだけど……ちよつと違うかな」

5

「えつ、そんな……。僕の推理のどこが間違つていたんですか？ 教えてください」 永緑はうろたえた。

「そうだね……」 赤瀬は一瞬考えるそぶりを見せてから、永緑に質問した。「じゃあ、訊くけど、君の推理が正しいとしたら、どうしてAさんはカーテンを閉めたんだろう？」

「それは……」 永緑の目が泳いだ。「……わかりません。先輩はどう考えたんですか？」

「君の推理とほとんど同じだから、これは別解とも言えるんだけど……」 明瀬はそう前置きしてから始めた。「何度か言ったとおり、この事件のポイントは、なぜ密室が作られたのか、だ。君の解釈との違いは、ここだけだった。君の推理では、奥さんに生命保険が下りないようにするのが、密室の目的だったけど……」

「先輩の考えでは、密室にはそれとは別の意味があったということなんですか？」

「うん。ここでポイントとなるのが、Aさんがなぜ現場を密室にした後でカーテンを閉めたのか、犯人の指紋をわざわざ凶器からぬぐい取つてまでしたかったこととはいつた何なのか、そして、Aさんが奥さんに対して抱いていた恨みは、どれほどのものだったのか。この三つだ。……とは言つても、これらの答えは一つの目的に集約される」

「一つの目的、ですか？」

明瀬は頷いて、

「その目的というのが、密室の動機——奥さんに殺人の罪を着せること、なんだ」

「えつ、奥さんに罪を……？」

「うん。もし、Aさんの血がカーテンについていなかったとしたら、この事件はどうなつていただろう？」

明瀬は永緑の考えを促した。

「えつと、カーテンに血がついていなかったら……近所の女性がAさんの死体を発見することはなかったでしょうね。彼女はカーテンの赤い染みを不審に思ったわけですから……あ、ああっ！」

「そうなんだよ。Aさんの奥さんが犯人ではないことを君が主張するときに言ったとおり、カーテンが閉まっていると、遺体の発見が遅れ、死亡推定時刻の幅が広がる。すると、奥さんにアリバイがで

きにくくなる。密室に閉しても、奥さんは合鍵を持っているのだから、窓に鍵をかければ、奥さんが疑われることは必至だ。君はこのことに気づいていたのに、奥さんが犯人でないことを論証するための材料として使った後で、それを捨ててしまったんだね」

「そんな……」

永緑は自分が答への前を素通りしてしまっていたことが悔しいようだった。

「Aさんが犯人の指紋を包丁から拭き取ったのも、それが残っていると、奥さんを犯人に仕立て上げることができないからだ。そして、Aさんが奥さんに抱いていた恨みは……残念ながら、それほど——自分を刺した犯人に対する感情より、ずっと強いものだったわけだ」

明瀬は茶碗を口に持って行って、お茶を少しすすった。すっかりぬるくなっている。話に集中して、時間の経過に気づかなかったようだ。窓の外も、もう赤くなりつつあった。

明瀬は、先を急いだ。

「これが——正しいかどうかは別として——最もありえそうな解釈なんだけど……それとは別に、もう一つ、好意的なとらえ方をした解釈があるんだ」

「も、もう一つ？ いったいどんな解釈が……？」

「これは起こったであろう出来事を、なるべく好意的に受け取った場合の解釈だから、真相である可能性は低いんだけど……」

「前置きはいいですから、早く教えてくださいよ」

「うん。……この解釈においても、現場で起こった出来事はほぼ同じだ。BさんがAさんを刺して逃げた後、Aさんは窓とカーテンを閉めた。ただし、包丁の持ち手が血まみれで、犯人の指紋が採取できなかったことは偶然であり、また、窓に鍵がかかっていたのは、Aさんが窓を閉めたときに無意識にかけたからだ、とこの解釈では考える。無意識、というのはちよつとこじつけの感が否めないけど、

まあ、これは好意的な解釈だから許してほしい。

さて、Aさんの行動の動機について。Aさんが窓とカーテンを閉めた理由。それは、自分の死体を外から見えなくすることだ。そのため、カーテンを閉める必要がある、カーテンを閉めただけでは風が吹き込んでそれがめくれ上がるかもしれないので、窓を閉めなければならなかったんだ」

「どうして自分の死体を隠すんですか？」

「死体を見せたくない相手がいたんだよ。Aさんの家のある場所は一軒家が少なく、通るのは通勤通学する人々のような、そのあたりに住む人くらい——前にそう言ったよね。これを言い換えると、Aさんの死体は通勤通学する人物が発見する可能性が高い、ということ。Aさんの遺体が発見されたのは三時ごろで、その時点で死後約一時間経過していたんだから、Aさんが死んだのは午後二時ごろ。Aさんが夕方になるまで発見されない可能性は十分あったわけだ。Aさんは、下校する小学生たちに人間の死体を見せないようにするために、窓とカーテンを閉めたんだよ」

明瀬は一度話を切って、お茶を飲んだ。

「もちろん、これは好意的な解釈だから、問題点は多い。死体が外から見えないようにするだけなら、別の部屋に行けばいいわけだし、さっき言ったように、無意識に鍵をかけるとは考えにくい。それに、よほどの子供好きか、変わり者でもない限り、死の間際に、赤の他人である子供たちのことを思い浮かべるとも思えない。ただ、個人の意見を述べさせてもらうと、こっちの解釈のほうが好みに近いかな。いくら救いがあるからね」

日は傾いて、明瀬の顔を赤く照らしていた。

暗くなってきたので、明瀬は入口のドアの横にある蛍光灯のスイ

ツチを入れた。その時、永緑が不意に口を開いた。

「ところで、Aさんが入っていた生命保険は、どこの保険だったんですか？」

「え？ それは知らないけど……どうして？」

「テレビのサスペンスドラマばかり見ていると誤解しがちですが、生命保険というのは、自殺の場合は必ずしも保険金が支払われないわけではありません。基本的には、保険に入ってから短くて一年、長くても三年間ほどたてば、自殺でも生命保険が支払われるんです。でも、Aさんが生命保険に入ったのは、五年前なんでしょう？ だから、ちよつと特殊な保険なのかな、と思って……」

いつの間にか、明瀬の体はこわばっていた。顔面蒼白で、目だけがせわしなく動いていた。数秒後、

「まさか……」

とつぶやき、明瀬は驚くべき勢いでデスクに飛びついた。そして、パソコンの電源ボタンを押した。

その様子にただならぬものを感じた永緑は、いたって慎重に訊いた。

「どうしたんですか……？」

「……うん？ ああ、ごめん……」明瀬は一瞬、永緑の問いかけに気づかなかったようだった。「もしかすると、とんでもない事態になっているかもしれない……。依頼人の佐藤さんは、ミス研の先輩だった清木さんの名刺を持っていた。紹介状がなかったけど、あの人はだいぶ浮世離れしていたし、それもあの人らしいな、と思って依頼を受けたんだけど……」

深刻そうな声で言いながら、永緑はデスクの端の固定電話の受話器を取り、番号を打ち込んだ。

「どこにかけるんですか？」永緑は訊いた。

「清木先輩の家だ」

呼び出し音は鳴らず、その代わりに、その電話番号が使われてい

ないものであることを告げる機械的な女性の声 flowed。明瀬は一度受話器を戻し、また取って別の番号に電話をかけた。今度は呼び出し音が鳴った。

パソコンが立ち上がった。明瀬は受話器を耳と肩の間に挟んだ。すばやくマウスを動かし、キーボードをたたく。

電話の相手が出たようで、明瀬はパソコンの画面をじっと見つめたまま、話し始めた。

「もしもし黄金井さんですか？ はい、明瀬です。清木先輩のことなんですけど、もしかして……ええ……ああ、やっぱり……そうですか、わかりました。また近いうちに連絡します。ありがとうございます……」

明瀬は茫然自失の表情でパソコンから目を離し、受話器を置いた。

「そんな……」

「……大丈夫ですか？」

永緑が心配して尋ねたが、明瀬の目はどこか遠くに向けられたまま動かなかった。とりあえず、永緑は力の抜けた明瀬を立ち上げらせてソファに座らせた。

長い間、明瀬は黙って座っていたが、ある時、唐突に口を開いた。出てくる声の調子はまるでうわごとのようなようだった。

「清木先輩は、ずいぶん変わった人だったから、スマートフォンも、携帯電話も持っていなかったよね。先輩の家には、固定電話しかなかった……。先輩は、佐藤さんにこの探偵事務所のことを話したことがあったんだろう。今思えば――」

「何を言っているんですか？」

その時、やつと明瀬が永緑の方に目を向けた。ただし、その目つきはうつろだった。

「……AさんとBさんは、それぞれ、清木先輩と、佐藤さんだったんだ」

永緑はしばらく、その意味を理解できなかった。しかし、何とか

明瀬の言葉をのみこむと、

「……え、え、それは、今まで僕たちが話し合っていた、事件の被害者Aさんは、僕たちの先輩だった、清木さんで、先輩を殺した犯人が依頼人の、さ、佐藤さんだと……？」

「……うん」明瀬は大きく息を吐いた。「そうなんだ。さっきミス研の黄金井先輩に確認したけど、清木先輩は今年の四月に殺されたらしい。それに、佐藤さんからもらった名刺。こんな名前の会社は検索しても、どこにも見当たらない。佐藤健太郎という名前も偽名だろう。確かに、おかしいところはあった。保険調査会社の人間が探偵を頼ることもそうだし、紹介状がなかったこともそうだ。

……佐藤さんを紹介したかどうかを清木さんに確認しなかったのが、最大のミスだった。これじゃあ、完全紹介制の意味が全くない……」

明瀬は暗い顔で唇をかんだ。

「で、でも、それはしょうがないですよ。清木さんの性格を考えると、むしろ、紹介状がない方が自然ですから」

永緑は必死に慰めようとした。しかし、明瀬は沈んだ表情のまま

で、
「そう言ってくれると助かるよ。でも、この失敗は絶対に避けるべきだったんだ……」

そう言っとうつむき、頭を抱えてしまった。永緑はかける言葉が見つからず、口を閉じた。

ややあつて、明瀬は頭から後悔を振り払い、顔を上げた。そして、すつと息を吸い込むと――まだ若干、表情に陰りが残ってはいいたが

――大きめの声で話し始めた。
「話はちよつと変わるんだけど、佐藤さんがBさんだとすると、ちよつと気になるところがあるんだ」

「何が気になるんですか？」
「彼が犯人だとすると、彼は、自分が殺した男の知人の探偵事務所

にのうのうとやってきたことになる。彼の目的は何だったんだろう？ 殺した男がどうして密室で発見されたのかという疑問を解消してもらおうとしたのか、それとも、自分の行った犯罪を誇示しようとしたのか……。どちらにせよ、普通の人間にとつては考えられないことだ。だけど、彼はそうした。このことから察するに、彼は自分の犯行を隠そうとしないし、警察に捕まることを恐れてもいない。それどころか、罪の意識すら感じていないかもしれない」

「そんな人が……」
「いるんだよ、良心が全く欠如してしまっている人がね。前に解決した事件にも、そんな犯人がいた。その犯人は、街中で肩がぶつかったのと同じ程度の、くだらない動機で人の命を奪っていたよ。彼らのような人間は、非常に危険だ。このまま放っておくと、もしかすると、また別の殺人を犯してしまうかもしれない。だから……」

「だから……？」
「絶対に捕まえないとね。かたき討ちの意味も込めて」
そう言う明瀬の目からは、強い信念のようなものが感じられた。

「ええ、そうですね」永緑は頷いた。

それからしばらくは、二人とも何も言わないでいたが、ある時、不意に永緑が沈黙を破った。
「……あの、ところで、Aさんが清木先輩だとすると、事件の解釈はどうなるんでしょうか？」

「ああ、うん。それに関しては、少しだけ、とらえ方を変更する必要があるそうだね。まず、別居の原因だけど、先輩のことだから、大喧嘩したわけじゃなくて、奥さんが愛想をつかして、一方的に出て行っただけなんじゃないかな。それでも案外、先輩は何とも思わなかったかもしれないけど……。まあ、これは想像だから、実際のところはわからない。でも、清木先輩が人をそんなに恨むとも思えないから、奥さんを恨んで家を密室にしたという解釈は違う気がする

るね」

「そうだとすると、密室の謎はどうなるんですか？ 奥さんを恨んでいなかったのなら、清木さんはなぜ密室を作ったんですか？」

「清木先輩が被害者だと考えると、あの密室はこうとらえることもできる——すなわち、佐藤さんが彼を刺して逃走した後、彼は、ただ密室を作るという目的のためだけに、密室を作った」

「それはつまり、清木さんが密室を作ってみたかったから作ったということですか？」

「うん。だって清木さんは、ミス研で一番のミステリマニアだったんだよ。密室を作ってみたいと思ってもおかしくはない。ましてや彼は——こういっては悪いかもしれないけど——かなりの変人だ。たとえ死の間際であっても、それを実行することは十分にあり得ると思う。」

「密室は、元ミス研随一の変わり者が残した、最期の悪戯だったんだ」